

教 育 研 究 業 績

氏名 別府さおり

学位: 博士 (心身障害学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学、教育学	障害児者の心理学、特別支援教育	
主要担当授業科目	障害者・障害児心理学、障害者心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）、福祉心理学、関係行政論、発達心理学セミナー、心理学文献講読、卒業研究	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 学外授業の実施	平成26年4月1日～平成31年3月31日	東京成徳大学の授業「福祉心理学基礎演習」で、ボランティア活動（千葉県ゆうあいピック、近隣の高齢者施設）や特別支援学校参観、国際福祉機器展参加といった学外授業を実施している。毎年、当事者の理解や将来の仕事への見通しをもつことに役立った、人と関わる喜びを得た、自分自身を振り返る機会になったという感想が多数であった。
2) メディアや実物を活用した授業実践	平成26年4月1日～	東京成徳大学の授業「障害者・障害児心理学」「障害者心理学特論」等で、特別支援学校の授業や福祉施設での活動の様子を映像を交えて解説し、また具体的な事例の話を盛り込みイメージを持ちやすいようにしている。さらに、実際に特別支援学校で用いられた教材を紹介している。学生の感想からは、現場の実際や教材の利点を知るだけでなく、当事者の行動の背景、当事者と支援者との関わり、当事者の変容等に着目し考察していることが窺われる。
3) 教材の工夫やアクティブラーニングを取り入れた授業実践	平成26年4月1日～	東京成徳大学の授業「福祉心理学基礎演習」で、学生同士での発表や討議の際にルールや手続きの明示、記録・評価表の工夫を行った。学生からは、話し合いがスムーズに進んだ、色々な人の意見を聞くことが大事だと思った、といった感想が出された。また、レポート完成までの過程をスモールステップ化してワークシートにし、積極的に机間支援を行うことで学生の参加や理解を促すことができた。 「心理教育指導法Ⅰ（知的障害）」では、「事例について各自で考える→学生同士の意見交換→解説→振り返り」の流れで、思考を深めるとともに学習内容の定着を図った。
4) 学生の学習指導案作成と模擬授業の指導	平成26年4月1日～令和3年3月31日	東京成徳大学の授業「福祉科教育法」「教育実習（福祉）」「特別支援教育実習」で、「学習指導案の作成→添削」を繰り返して、特に単元設定の理由の明確化と1単位時間の授業構成の仕方の理解、文章表現力の向上に繋がった。また、学生の模擬授業を撮影して振り返りに用い、客観的な自己評価及び他者評価できる力

5) ポスター発表の実施	平成26年4月1日～平成31年3月31日	を養うことに努めた。 東京成徳大学の授業「福祉心理学基礎演習」で、学生が自分でテーマを決め調べた成果をポスターにまとめ、学園祭にてポスター発表を行った。授業では作成した「ポスター発表の手引き」をもとにテーマの決め方、ポスター作成の仕方等について講義し、個別相談にも応じている。一連のプロセスを通して、学生の興味・関心のある分野の内容理解につながっている。また、自ら専門分野の教員に質問に行くなど意欲的な姿勢が見られ、学内の教員からも好評を得た。
6) ミニ授業アンケートの導入	平成30年4月1日～	東京成徳大学の授業「障害心理学II」「福祉心理学基礎演習I」で、リアクションペーパーにミニ授業アンケートを組み込んで実施を試みた。評価をもとに話し方の改善、プリント教材の改良につなげることができた。
7) 遠隔授業における工夫	令和2年5月1日～	オンデマンド型ではできるだけ双方向になるよう、学生の考えの紹介とそれに対するコメント、質問への回答を多く取り入れている。リアルタイム・双方向型では、グループワークや発言の促しによる学生の授業への参加促進を行っている。また、遠隔授業が苦手な学生のためのマニュアル作成、通信環境に配慮した教材作成等を行っている。
2 作成した教科書・教材		
1) 特別支援学校（知的障害）における教材開発	平成18年4月1日～平成26年3月31日	学習内容の理解を促し、日常生活技能や社会性、働く態度の獲得・向上を図るため、教材開発に取り組んだ。具体的には、ビデオや写真等の映像の活用、オリジナルビデオ教材、人との距離感や声の大きさ等目に見えないものを視覚化した教材、作業学習における治具等の作成と活用である。
2) 大学の授業における教材開発	平成26年4月1日～	東京成徳大学の授業で、学習内容の理解を促すため、専門的な内容をまとめ再構成したプリントや、ポスター発表の手引き等を作成し活用している。また、ワークシートの活用により、学生の参加と理解を促している。（前掲1 3）、4）
3) ～主に小学校で使える～福祉教育プログラム集＜障害編＞	平成31年3月31日	共に生きる力を育むことを目的とし、学級づくり編、障害編、交流・体験編と体系的に障害者の理解が進むよう構成されている。当プログラムは中学生、高校生向けに発展させることもできる。（分担執筆箇所：p.4～5 系統図、p.14～17、p.36～38）
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 東京成徳大学FD研究会の実施した授業評価	令和2年度	「福祉心理学」「障害者・障害児心理学」について参観者から、「前回の授業の振り返りが充実している」「学生の考えを紹介していて、良い学び合いの機会になっている」「声が聞き取りやすい」「補足教材が興味深く、考える材料となっている」等の意見が挙げられた。
2) 東京成徳大学の担当科目に関する受講生による授業評価アンケート	令和4年度	「この授業を受けて自分のためになったか」について、「福祉心理学」では3.55(SD=0.50)点、「障害者・障害児心理学」では3.69(SD=0.53)点、「障害者心理学特論」では3.67(SD=0.47)点

		(対面授業)であった(いずれもMax4.00点)。その他すべての項目が3.00点以上であった。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 特別支援学校における教育実習生の指導	平成18年度～平成24年度	筑波大学附属大塚特別支援学校にて、教員免許状取得を目指す教育実習生を指導した。
2) 筑波大学人間学群障害科学類非常勤講師	平成22年8月23日	筑波大学学類・大学院生対象の「知的障害学校教育論」を担当し、特別支援学校(知的障害)における教育実践、高等部卒業後の進路等について紹介した。
3) すてっぷ～川口鳩ヶ谷障がいのある子ども達をつなぐ会～主催「成人期に向けた学習会」講師	平成24年3月24日、平成26年2月4日、平成28年2月4日	平成24年「卒業後の生活と学齢期から学びたいこと」、平成26年「卒業後の生活と学齢期から学んでおきたいこと」、平成28年「卒業後の暮らしと学齢期から学んでおきたいこと」のタイトルで、保護者向けに講話を行った。
4) 筑波大学公開講座講師および実技指導員	平成24年7月24、25日、平成25年7月6、22日	平成24年度「知的障害特別支援学校における心理検査を活用した指導の実際」の講師、平成25年度「特別支援教育における社会性支援のための音楽活動①・②」の実技指導員を担当した。
5) 筑波大学特別支援教育研究センター現職教員研修演習講師	平成25年5月22日、6月26日、9月25日	筑波大学特別支援教育研究センター現職教員研修演習「知的障害のアセスメント(実態把握)」、「知的障害の支援の実際」、「知的障害の指導法(教材・教具)」の講師を担当した。
6) JICA(独立行政法人国際協力機構)アフリカ地域研修講義講師	平成25年12月9日	アフリカからの研修生を対象に、個別の教育支援計画についての講義の講師を担当した。
7) 八千代市「おにいさんおねえさん子ども電話相談」相談員研修会講師	平成27年3月26日、平成28年3月23日	東京成徳大学にて新規相談員を対象に、平成26年度は「児童生徒と心理」、平成27年度は「児童生徒と学校」「児童生徒と心理」の講師を担当した。
9) 東京成徳大学応用心理学部福祉心理学科主催・日本福祉心理学会後援公開シンポジウムコーディネーターおよび話題提供	平成27年7月18日	公開シンポジウム「手をとり合おう！教育と福祉ー共生社会の実現を、教育と福祉から考えるー」のコーディネーターおよび話題提供者を務めた。
10) 東京成徳大学教員免許状更新講習講師	平成27年7月30日、平成29年8月9日	平成27年度は「気になる子どもと家庭への支援ー特別支援教育と福祉の観点からー」、平成29年度は「特別なニーズのある児童生徒の理解と具体的な支援」の講師を担当した。
11) 2015年度東京成徳大学八千代キャンパス一般公開講座講師	平成27年12月12日	「脳を使う！～前頭葉機能を中心に～」のタイトルで、市民向け講座の講師を担当した。
12) 筑波大学附属大塚特別支援学校「大塚の教員と授業づくりを学びたい人のための自主研究会」講師	平成28年7月15日、8月30日	現職教員を対象にした研究会の講師として、「学習内容表から授業の目標を立てるプロセスを学ぶ①②」の2回を担当した。

13) 千葉県立八千代特別支援学校全校研修会講師	平成29年4月25日、平成30年4月25日	平成29年度は「明日の授業につながる実態把握の方法と授業への活用」、平成30年度は「実態把握の意義と授業につなげるための工夫」の講師を担当した。
14) 第25回DN-CAS認知評価システム技術講習会講習会講師	平成29年11月18日	DN-CAS認知評価システムの解説及び技術指導を行った。
15) 八千代市特別支援教育講演会講師	平成31年1月26日	「ともに生きる社会をめざす特別支援教育-子どもをみんなで支えるために-」のタイトルで講師を担当した。
16) 専修大学学校司書課程講演会	令和2年2月25日	「学校司書に知っておいてほしい特別支援教育のこと」のタイトルで講師を担当した。
15) 八千代市特別支援教育講演会講師	令和4年1月	「事例を通して考えるインクルーシブ教育」のタイトルで講師を担当した。(オンデマンド配信)
5 その他		
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許	平成10年2月 平成11年3月 平成12年6月 平成13年3月 令和元年10月	小学校教諭二種免許状(平9小2第28号・長野県) 高等学校教諭一種免許状(公民、平10高一第1096号・茨城県) 中学校教諭一種免許状(社会、平12中一第0048号・茨城県) 養護学校教諭専修免許状(平12養学専第0016号・茨城県) 公認心理師(第31692号)
2 特許等		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 他職種と連携した共同研究	平成18年4月1日～24年3月31日	筑波大学教員および行政、グループホーム等を運営する社会福祉法人と連携し、個別の教育支援計画と移行支援、卒業後の生活、卒業生調査と教育課程に関する共同研究を行った。成果は学術論文や日本特殊教育学会自主シンポジウムにて公表した。(後掲 学術論文4)、5)、学会発表8)、9)、11)、13)、14)、16)、18))
2) 特別支援教育専門家チーム委員、特別支援学校ケース会議講師	平成26年4月14日～	小中学校および特別支援学校の巡回相談等を行っている。
3) 八千代市「おにいさん・おねえさん子ども電話相談」スーパーバイザー	平成26年4月1日～平成29年3月31日	八千代市「おにいさん・おねえさん子ども電話相談」のスーパーバイザーを務めた。
4) 筑波大学附属大塚特別支援学校合理的配慮協力員	平成27年10月1日～平成28年3月31日	合理的配慮協力員として、心理検査に基づいた合理的配慮のアドバイス等を行った。
5) 八千代市子ども・子育て会議委員(令和元年度、2年度は委員長)	平成29年4月1日～	八千代市の子育て施策に関する助言や成果の検証を行っている。
6) 筑波大学附属大塚特別支援学校研究講師	平成29年5月17日～令和3年	筑波大学附属大塚特別支援学校研究講師として、校内授業研究会、研究協議会等で授業参観および助言を行った。

7) 福祉教育プログラム<障害編>検討委員会委員	3月31日 平成29年11月～平成31年3月31日	各学校と地域における福祉教育を推進するため、授業等で活用できる小学校高学年向けの福祉教育プログラムの開発を行った。(前掲2 3))
<p>4 その他 (大学における指導)</p> <p>1) 実習指導</p> <p>2) 卒論・修論指導、学生との共同研究</p> <p>3) 学外授業、参観実習の企画および引率</p> <p>4) 翠樟祭の企画推進</p> <p>5) 東京成徳大学八千代キャンパス「トリプルM(Myゼミ・Myサークル・Myティーチャー)プロジェクト」 ・「ピア・スーパーヴィジョン」</p> <p>・「つながる!SNE(Special Needs Education)」</p> <p>・「福祉と教育を考える会」</p>	<p>平成26年4月1日～</p> <p>平成26年4月1日～</p> <p>平成26年4月1日～</p> <p>平成26年4月1日～平成30年10月</p> <p>平成26年4月1日～平成29年3月31日</p> <p>平成26年4月1日～平成30年3月31日</p> <p>平成27年4月1日～平成30年3月31日</p>	<p>教育実習(高校福祉科、特別支援学校)、社会福祉総合実習、公認心理師実習の実習指導を行っている。</p> <p>卒業論文指導をした学生のうち1名は、研究成果を就職先の航空会社で実際のサービスとして反映させた。また、学生との共同研究を学術論文、学会発表として公表した。(後掲学術論文12)、19)、20)、学会発表35)、36))</p> <p>学外授業:千葉市ゆうあいピック、国際福祉機器展(前掲教育方法の実践例1 1))。平成27年度「地域ボランティア」では千葉県電動車椅子サッカー大会ボランティア参加の学外授業も実施した。 教職課程専門委員会企画の参観実習:八千代市立中学校、千葉県立松戸向陽高等学校授業公開および介護実習報告会。</p> <p>「福祉心理学基礎演習II」の受講者とともに、東京成徳大学八千代キャンパス学園祭(翠樟祭)にてポスター発表(前掲教育方法の実践例1 5))、障害者の働く店から仕入れたパンの販売、障害者体験、障害者スポーツ体験等の企画を実施した。また、「地域ボランティア」の受講者が行ったフリーマーケットやブレイルーム開放の企画を支援した。</p> <p>八千代市「おにいさん・おねえさん子ども電話相談」相談員の学生が主体で毎月実施する茶話会に参加し、スーパーバイズを行った。また、毎年1～2回の八千代市職員との話し合いと相談員研修会を実施した。平成27年度には、「千葉県学生ボランティアとか超会議」にて相談員の学生が発表を行うにあたり、実行委員会との連携をサポートした。</p> <p>教職課程履修学生を主な対象とし、特別支援学校参観等の企画・引率、振り返りを行った(平成26年度:王子特別支援学校、王子第二特別支援学校、平成27年度:四街道特別支援学校、八千代特別支援学校、千葉大学教育学部附属特別支援学校公開研究会、平成28年度:筑波大学附属大塚特別支援学校知的障害児教育研究協議会、千葉大学教育学部附属特別支援学校公開研究会、平成29年度:筑波大学附属大塚特別支援学校文化祭)</p> <p>教職課程履修学生を主な対象とし、毎年1回、情報交換会を開催した。その他、平成27年度は高校福祉科教諭を講師に招いた特別講義、平成28年度は児童養護施設の見学、平成29年度は絵本の読み聞かせの練習を行った。</p>

<p>・「実践力向上ゼミ」</p>	<p>平成29年4月1日～平成30年3月31日</p>	<p>ボランティアや施設見学を通し、現場を知り実践を通した学びを深めることを目的に、施設見学の企画、学生によるボランティア活動紹介の機会設定を行った。</p>
<p>(大学運営に関する諸活動) 1) 東京成徳大学八千代キャンパス教職課程専門委員会委員 (平成26, 27, 30, 31年度は副委員長、平成28, 29年度は委員長)、全学教職課程運営委員会委員</p>	<p>平成26年4月1日～令和2年3月31日</p>	<p>教職課程の質の向上と運用の改善に努め、履修カルテの実質的運用、教員採用模擬試験受験体制の強化、学校インターンシップ及びボランティアの推奨、参観実習や情報交換会の企画・運営等に取り組んだ。また、介護等体験事前・事後アンケートを導入し、充実を図った。学校インターンシップでは八千代市教育委員会との連携を深め、事前面談の強化、活動日誌の作成と運用を行い学生が意志と意欲をもって参加できるよう改善を図った。東京成徳大学教職課程年報刊行の中心的役割を担い、平成30年3月、創刊を実現した。</p>
<p>2) 東京成徳大学八千代キャンパス学生委員会委員</p>	<p>平成26年4月1日～平成27年3月31日</p>	<p>学生に関する事案の検討や指導、面談等を行った。</p>
<p>3) 東京成徳大学八千代キャンパス就職委員会委員</p>	<p>平成30年4月1日～平成31年3月31日</p>	<p>就職支援のあり方の検討、キャリア支援担当と連携した学内企業セミナーや相談会への学生の参加の支援を行った。</p>
<p>4) 東京成徳大学基礎・教養教育センター委員</p>	<p>平成30年5月14日～令和4年3月31日</p>	<p>基礎・教養教育科目に関する検討を行った。</p>
<p>5) 東京成徳大学八千代キャンパス障がい学生支援委員会委員 (委員長)</p>	<p>平成31年4月1日～令和3年3月31日</p>	<p>障がい学生支援に関する体制整備や、合理的配慮の提供の検討を行った。</p>
<p>6) 東京成徳大学障がい学生支援委員会委員</p>	<p>令和3年4月1日～</p>	<p>障がい学生支援に関する体制整備や、合理的配慮の提供の検討を行っている。</p>
<p>(社会的活動)</p>		
<p>1) 八千代市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定懇談会委員</p>	<p>平成27年8月11日～平成30年9月19日</p>	<p>八千代市の人口動向に基づいた各施策についての協議および効果の検証を行った。</p>
<p>2) 八千代市教育サミットへの参加</p>	<p>平成26年8月～</p>	<p>八千代市教育サミットに参加し、八千代市教育委員会および市内の小中学校、高等学校、大学の教員とともに教育の現状について情報交換を行った。</p>
<p>3) 千葉県社会福祉協議会との連携</p>	<p>平成27年7月～令和3年3月</p>	<p>千葉県社会福祉協議会職員と、大学ボランティアセンター等についての情報交換を行った (平成27年度は本学にて情報交換、平成28年度は県内大学ボランティアセンター等情報交換会に出席)。また、平成27年度「千葉県学生ボランティアとか超会議」、平成28年度「千葉県学生ボランティアミーティング」、平成29</p>

4) 高大連携事業への参加	平成26年12月 ～令和3年3月	年度「千葉県学生ボランティアチャレンジ2018」に出席した。 ・平成26～28年度：千葉県立松戸向陽高等学校のミニ集会（開かれた学校づくり委員会）に出席した。 ・平成29年度：千葉県福祉教育部会研修会に出席した。
---------------	---------------------	--

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) これからの「知的障害教育」	共著 (分担)	平成22年11月	明治図書(85-88頁)	自立と社会参加に向け子どもに身につけてほしい力と、指導計画と授業づくりのポイントを明確にすべく、学習内容表の編成と授業研究に取り組んだ成果のまとめである。 分担執筆部分は「第三章 子どもたちは『どのように』学ぶのか？(4)高等部の教育」の「生活単元学習 働く態度を身につけよう」である。校内実習の様子をビデオ映像で振り返り、身についたことと課題を自己評価し、改善・向上への気づきを促した授業実践と事例についてまとめた。(当該部分執筆者：別府さおり・西原数馬)(執筆者：柳本雄次監修・筑波大学附属大塚特別支援学校編著)
2) 特別支援教育のとおき授業レシピア	共著 (分担)	平成27年3月	学研教育出版(本書92-95頁、CD-ROM「人間関係領域」12,13,14、「情操領域」27,28、「コミュニケーション領域」7、「社会生活・進路学習領域」5)	幼稚部から高等部の各時期の子どもに何を教えるのかを示した「学習内容表」と学習内容をどのように教えるのかを示した「指導計画集」によって構成されている。 分担執筆部分は、「第2章 学習内容表と授業づくりの実践」の「実践事例7 ぼくたちのかいこちゃん」、「入門！そらぐみ道場～姿勢の段～」、「入門！そらぐみ道場～力を合わせるの段～」、「入門！そらぐみ道場～めざせ！すてきなそらぐみの段～」、「楽しもう！合わせよう！表現しよう！～運動会に向けて～」、「広げよう！伝えあおう！ともに楽しもう！」、「お互いをよく見て、受けとめあおう」、「自分で使えるサポートブックを作ろう！」で、小学部、中学部、高等部における指導計画と実践の成果をまとめた。 (執筆者：高橋幸子・田上幸太・吉井勘人・森澤亮介・飯島啓太・石飛了一・高津梓・仲野みこ・阿部崇・菅野佳江・別府さおり・他33名。柘植雅義・藤原義博監修、筑波大学附属大塚特別支援学校編)

				著)
(学術論文) 1) Crack-the-Code を用いた注意欠陥/多動性障害児のプランニングの検討	共著	平成 15 年 3 月	心身障害学研究 (第 27 巻/19-29 頁)	Crack-the-Code を用い、ADHD 児および健常児群のプランニングの発達の变化と配列の正誤にみられるプランニングの特徴を検討した。健常児群では中学 1 年生から 2 年生にかけて正答率が上昇した。ADHD 児の半数が健常児群と同様の正答率を示したが、正答率が低く、高いエラー率と低い修正率を示した者も認められた。また、ADHD 児は健常児群に比べ課題遂行時間が短い者が多く、プランの結果予測や評価・調整が困難で精緻化されていないことが推察された。(別府さおり・岡崎慎治・前川久男・二上哲志)
2) 注意欠陥/多動性障害児のプランニングに関する研究—Crack-the-Code を用いた検討—	単著	平成 18 年 3 月	筑波大学 212 頁 (42 字×32 行) 学位論文 (博士)	Crack-the-Code を用いて、最初の潜時、エラー数、発話等を分析し、ADHD 児と健常児との比較検討を行った。その結果、ADHD 児は初期状態の理解や情報の整理、目標状態の設定等の表象が不十分であり、また結果予測も不十分で生じたエラーを修正しつつ解決し、健常児に比べ試行錯誤的であることが示唆された。発話のフィードバックによる改善効果も認められた。
3) 注意欠陥/多動性障害児のプランニングの特徴—Crack-the-Code を用いた検討	共著	平成 18 年 6 月	小児の精神と神経 (第 46 巻第 2 号/105-112 頁)	Crack-the-Code を用いて、配列の正誤、最初の潜時、エラー数、修正数等について統制群との比較および事例検討を行った。ADHD 児は表象に時間をかけず初期状態の理解やゴールの設定の前に移動を開始すること、表象や結果予測が不十分であることが示された。ADHD 児は健常児に比べ試行錯誤的な問題解決過程をたどる場合が多いことが示唆された。(別府さおり・岡崎慎治・前川久男・市川正嗣・二上哲志・立川和子)
4) 社会生活への移行期にある「個別の教育支援計画」の実践的研究—優先目標設定および評価/改善の視点とプロセス	共著	平成 19 年 3 月	筑波大学学校教育論集 (第 29 巻/63-72 頁)	「個別の教育支援計画」の優先目標設定および、評価/改善の視点とプロセスについて具体的な教育実践に沿って検討し図式化を試みた。また、生徒に関する現状認識、発達の状況、教師側のねらい、実習先、関連機関との連携、本人・保護者の希望の 5 つの視点から考察した。(田上幸太・別府さおり・宇佐美太郎・堀田英子・伊藤かおり・北村洋次郎・小林美千代・阿部崇・篠原吉徳・米田宏樹)

<p>5) 社会生活への移行期における「個別の教育支援計画」の在り方と今後の課題ー連携諸機関の支援者との協議から</p>	<p>共著</p>	<p>平成 20 年 3 月</p>	<p>筑波大学学校教育論集 (第 30 巻/45-53 頁)</p>	<p>社会生活への移行期にある、知的障害特別支援学校高等部における「個別の教育支援計画」および「個別の教育支援計画」を用いた支援の形成について、連携諸機関の支援者との協議を重ね、情報提供の在り方、連携の在り方、情報の保管・管理の視点から整理し、また「個別の教育支援計画」に関する今後の課題について考察した。(別府さおり・田上幸太・伊藤かおり・宇佐美太郎・堀田英子・居林弘和・小林美千代・阿部崇・篠原吉徳・米田宏樹)</p>
<p>6) 知的障害特別支援学校卒業生の生活の実態から考える学校教育の課題と教育内容 (1)ー調査結果の分析を中心にー</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 3 月</p>	<p>筑波大学学校教育論集 (第 31 巻/21-30 頁)</p>	<p>知的障害特別支援学校高等部の卒業生を対象に、生活の場に関する実態調査およびアンケート調査を実施した。平成 3、4 年度の調査に比べ、家族とスポーツをしたり家庭の手伝いをしたりする人の割合が増えたこと、学校で行った活動をきっかけとし卒業後の余暇活動に繋がっていくこと等が学校教育の成果として挙げられた。(別府さおり・田上幸太・阿部崇・宇佐美太郎・松岡ふみ・本間貴子・居林弘和・伊藤かおり・篠原吉徳・米田宏樹)</p>
<p>7) 知的障害特別支援学校卒業生の生活の実態から考える学校教育の課題と教育内容 (2)ー学校教育に対する評価についての分析を中心にー</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 3 月</p>	<p>筑波大学学校教育論集 (第 31 巻/31-52 頁)</p>	<p>卒業生調査の中から、学校教育に対する評価の項目の整理・分析を行った。バランスのとれた学習内容を精選するにあたり、学習内容を広く網羅することと、個別の教育的ニーズを明らかにし優先課題に取り組むことの双方の特性を十分に活かす必要があること、学校時代の継続した活動や人と関わる活動が、卒業後の社会生活の中で活かされる傾向があること等が示唆された。(田上幸太・別府さおり・阿部崇・宇佐美太郎・松岡ふみ・本間貴子・居林弘和・伊藤かおり・篠原吉徳・米田宏樹)</p>
<p>8) 知的障害特別支援学校卒業生の学習経験の分析ー卒業生へのインタビュー調査に基づいてー</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年3月</p>	<p>筑波大学学校教育論集 (第32巻/25-39頁)</p>	<p>卒業生を対象にインタビュー調査を行い、学校教育の成果と課題について考察した。教育課程改善に向け、印象に残りやすい行事単元を効果的な学習のために活用すること、作業学習や現場実習等働くことに向けた学習が現在の仕事を支えていること、人間関係のトラブルを解決、改善するような学習内容や指導の手立てが必要であることが示唆された。(別府さ</p>

<p>9) 高等学校福祉科教員養成の課題—教科「福祉」設置以前から現在まで—</p>	<p>単著</p>	<p>平成27年3月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 (第22号/63-70頁)</p>	<p>おり・本間貴子・田上幸太・宇佐美太郎・松岡ふみ・居林弘和・西原数馬・伊藤かおり・阿部崇・篠原吉徳・米田宏樹)</p> <p>福祉科設置以前および設置当初は、福祉科教員免許状の必要性や、現職教員等講習会等による免許状付与の問題点が指摘された。その後、福祉科全科目を相互関連性を持たせて指導できる教員、知識と現場経験を兼ね備え現場に精通している人材等、福祉科教員により高い専門性が求められるようになった。近年の研究でも同様の指摘がされており、教員養成の課題すべてが解決しているわけではないことが示唆された。</p>
<p>10) 公開シンポジウム「手を取り合おう！教育と福祉—共生社会の実現を、教育と福祉から考える—」報告</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年3月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 (第23号/37-57頁)</p>	<p>教育や福祉に携わってきた現場経験や学問的知見から、主に高等学校における福祉科教育の実際と、広義の福祉教育の意義と成果及び必要性について話題提供がなされた。指定討論では、福祉も教育も、人が一人の人として生きることに関わり支えていくことである、と捉える視点が提案された。今後、共生社会の実現や福祉教育を推進していくうえで、このような実践に裏打ちされた「語り」が説得力をもつと考えられた。(別府さおり・宮山篤・鈴木翠・白波瀬正人・前川久男)</p>
<p>11) 交流及び共同学習における教師の子ども理解と受け入れに関する一考察</p>	<p>単著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 (第24号/45-51頁)</p>	<p>交流及び共同学習を担当する教師の子ども理解や受け入れる姿勢、障害のある児童生徒との関わり、交流及び共同学習を通した変容について、先行研究をもとに検討した。交流及び共同学習を担当する教師には、一人一人の障害のある児童生徒に向き合い理解しようとする姿勢が求められると考えられた。</p>
<p>12) 幼児の習い事に関する研究—性差に着目した考察—</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 (第25号/97-104頁)</p>	<p>幼稚園児の保護者260名への質問紙調査の結果、習い事をしている幼児は5、6歳児において男児より女児に多く、女児は年齢が上がるにつれ週あたりの習い事の回数が増えることが示された。男児は女児に比べ「体を丈夫にするため」という理由で習い事を始めたケースが多く、内容もサッカーが多いといった性別による差異が認められ、保護者のジェンダー観の反映を示す結果であることが推察された。(別府さおり・阿久根雅)</p>

13) 事前・事後アンケートからみる介護等体験の成果と課題ーインクルーシブ教育時代の介護等体験のあり方への示唆ー	単著	平成30年3月	東京成徳大学教職課程年報 (第1号/11-28頁)	事前・事後アンケートの分析から、介護等体験を通して福祉職への理解や肯定的な捉え、特別支援教育の理解などにつながったことが示唆された。これにもとづき、インクルーシブ教育時代の教員の資質向上に寄与する可能性について検討した。また、本学における介護等体験について、事前オリエンテーションでの情報提供や体験前の個別指導、体験後の振り返りのあり方について、改善の視座を得た。
14) 知的障害教育に携わる教師の職能成長に関する検討ーライフコース研究を中心としたレビューー	単著	平成30年3月	東京成徳大学教職課程年報 (第1号/29-37頁)	特別支援教育に携わる教師のライフコース研究では、子ども理解、教育への熱意、知識・技術等が専門性として示されており、通常教育、特別支援教育を問わず教師に共通して求められる専門性が多く存在すると捉えられた。一方、領域・教科を合わせた指導など知的障害教育における固有の高い専門性を踏まえ、知的障害教育に携わる教師の職能成長過程を明らかにすることが必要であると考えられた。
15) 知的障害特別支援学校中学部における「願い」を育む体験を重視した授業実践の検討ー生徒・保護者アンケートと事例分析を通してー	共著	平成31年3月	筑波大学学校教育論集 (第41巻/17-28頁)	「願い」を育む体験を重視した生活単元学習の授業を実施した。生徒へのアンケートと保護者へのアンケート及び事例の分析から、生徒の興味・関心が広がったり深まったりした様子が明らかになった。知的障害のある生徒の「願い」は学校あるいは家庭で自分自身や友だちとともに経験した自分の「体験」が大きな基礎となっていると考えられた。(阿部崇・安達敬子・厚谷秀宏・工藤傑史・工藤真生・仲野みこ・深津達也・別府さおり・小島道生)
16) 知的障害を併せ有する自閉症中学生男子の能動性と対人関係の変化ーピボタル反応支援法を適用した事例ー	共著	平成31年3月	筑波大学学校教育論集 (第41巻/29-38頁)	体験活動を取り入れた生活単元学習の授業に1年間参加した生徒にピボタル反応支援法を用いた介入を行った結果、生徒の能動性が高まり、他者へと視点が向き、他者との良好な関わりが増えたことが明らかとなった。(工藤真生・深津達也・阿部崇・安達敬子・厚谷秀宏・工藤傑史・仲野みこ・別府さおり・小島道生)
17) 特別なニーズのある児童生徒が在籍する学級の学	共著	平成31年3月	東京成徳大学教職課程年報 (第2号/16-28頁)	後掲8 34)に加筆したシンポジウム報告である。教師の学びの個別性と共通性の

<p>級経営を通じた教師の職能成長—養成段階、特別支援学校（知的障害）教師、小学校教師それぞれが悩み、学び、獲得したこと—</p>				<p>双方を考慮していくことが必要であることが示唆された。（別府さおり・吉井勘人・田上幸太・井口素笑・小島貴之・中込昭彦）</p>
<p>18) 高等学校における通級による指導、特別支援学級、合理的配慮の現状と課題—インクルージョンを観点とした考察—</p>	<p>単著</p>	<p>令和元年5月</p>	<p>発達障害研究（第41巻第1号／8-16頁）</p>	<p>特集「インクルージョンにおける後期中等教育のあり方」の内の1編である。通級指導を開始したA高等学校教諭への聞き取りでは、生徒と教師の日頃の関わりや教育相談から通級指導を実施した成果と、教員の専門性や理解等の課題が挙げられた。A高校独自の教育課程により学校適応が良好になる生徒がいることは、インクルージョンを目指した学校改革の一つの切り口であると考察された。</p>
<p>19) 医療的ケアが必要な未就学児と保護者の社会資源の利用実態とニーズ—保育園への利用ニーズを中心に—</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年3月</p>	<p>東京成徳大学教職課程年報（第3号／2-29頁）</p>	<p>医療的ケア児の保護者 52 名を対象に質問紙調査を実施した。子どもが通える場では通園施設と児童発達センターの利用が多く、保育園は少なかった。保育園を利用しなかった理由の半数は医療的ケア児受入れ体制未整備であった。利用を希望しなかった主な理由は「初めから諦めていた」と「子どもの状態や体調に合った選択として通園施設等を利用した」であり、その他「退院後の時間を親子で過ごしたい」等の様々な回答も挙げられた。（伊藤瑚乃美・別府さおり）</p>
<p>20) 医療的ケアが必要な子どもに関する保育士の理解と保育園での受け入れについての意識</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年</p>	<p>福祉心理学研究（第17巻／12-28頁）</p>	<p>保育園に勤める保育士 233 名を対象に質問紙調査を実施した結果、他の障害種に比べ医療的ケアの理解度は低いことが明らかになった。保育園における医療的ケア児の受入れ自体には肯定的である一方、整備不十分な環境での受入れへの疑問も呈された。人的・物的環境、他機関との連携体制、研修機会等の整備が喫緊の課題であることが示された。（別府さおり・伊藤瑚乃美）</p>
<p>21) 知的障害教育に携わる教師の職能成長と学びの特徴—特別支援学校（知的障害）勤務経験と知的障害教育の専門性に着目して—</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年</p>	<p>特殊教育学研究（第60巻第4号／197-211頁）</p>	<p>知的障害教育に携わる特別支援学校教諭を対象に質問紙調査を実施した結果、職能成長に関連する重要な要素として「子ども理解と関係形成」、「保護者との連携」、「同僚との関係」が抽出された。教職経験年数が長くても特別支援学校勤務経験年数が短い教師は初任期と同様の困難を抱えやすいことが示され、同僚を介</p>

				した学びや支援の必要性が示唆された。 (別府さおり・吉井勘人・田上幸太)
(その他) 1 雑誌寄稿 1) 生徒が「わかる」個別教育計画-A くん の3年間の指導を通してー	共著	平成 21 年 11 月	自閉症教育の実践研究 (第 15 号/28-31 頁)	「指導の見通し図」を用いた三者面談を3年間継続し、本人・保護者・教員の共通理解の下、A くんはホテル業に就くことと給料でCDや本を買うことを目標に、作業学習中のおしゃべりをなくす、丁寧な言葉づかいをする等、働く態度を身につけることができた。そして、希望する進路先に就職し、給料で好きな物を買ひ、安定して働くことができている。(別府さおり・宇佐美太郎)
2 依頼原稿 1) 発達上のニーズを探るアセスメント	単著	平成 29 年 9 月	特別支援教育の実践情報 (2017 年 8-9 月号, 通巻 179 号/10-11 頁)	学校現場で発達アセスメント(心理検査、発達検査)を活用するために心がけたいこととして検査の理解、目的をもった実施、観察と日常の様子との照合が必要であること、アセスメントの結果を個の課題設定、指導の手立て、学習上、生活上の支援の側面で生かすことがポイントであることを述べた。
2) 特別支援学校小学部荷物整理等の日常生活に必要な活動が苦手な A さんへの支援	単著	平成 29 年 9 月	特別支援教育の実践情報 (2017 年 8-9 月号, 通巻 179 号/22-23 頁)	日常生活面での困難や気持ちのコントロールが課題となっている自閉症スペクトラム児に対し、DN-CAS、WISC-IV、PASS 評定尺度を用いたアセスメントを実施し、また、行動観察とエピソード記録を蓄積した。ケース会議にて導き出された、アセスメントの結果を根拠とした支援方針に基づき実践した結果、荷物整理でパニックになることが減り、認知機能の向上も認められた。
3 学校研究紀要 1) 高等部研究 II. 高等部の「個別の教育支援計画」ー支援課題の明確化ー 2. 「個別の教育支援計画」の優先目標設定の視点とプロセス (2) 生徒 A の事例	共著 (分担)	平成 19 年 2 月	筑波大学附属大塚養護学校研究紀要 (第 51 集/152-154 頁)	「個のニーズに応える特別支援教育の深化と充実をめざして(3)ー支援根拠の明確化と支援の具体化ー」の主題のもと、高等部1年生の「個別の教育支援計画」作成とそれに基づいた生徒への指導について報告した。(宇佐美太郎・別府さおり)
2) 高等部研究 III. 「個別の教育支援計画」に基づいた授	共著 (分担)	平成 19 年 2 月	筑波大学附属大塚養護学校研究紀要 (第 51 集	「個のニーズに応える特別支援教育の深化と充実をめざして(3)ー支援根拠の明

業実践－支援の形成－ 3. 環境・保健委員会の実践 (1) 環境・保健委員会について			／170-171 頁)	確化と支援の具体化－」の主題のもと、特別活動「生徒委員会」のうち環境・保健委員会の概要を報告した。
3) 「働く力を育てる授業づくり」(高等部) I. はじめに 3. 作業学習でつきたい力, 4. 授業づくりについて	共著 (分担)	平成 20 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 52 集/62-64 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－自立と社会参加をめざす教育内容と学習計画－」の主題のもと、作業学習でつきたい力と、作業学習の授業づくりで重視することや各学年段階における特色についてまとめた。
4) 「働く力を育てる授業づくり」(高等部) II. 授業づくりと改善 2. 焼き物班 4) 事例	共著 (分担)	平成 20 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 52 集/79-80 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－自立と社会参加をめざす教育内容と学習計画－」の主題のもと、焼き物班に所属した高等部生徒の目標、手だて、評価について報告した。
5) 高等部研究 II. 研究の実際 2. 生活単元学習の授業づくりのプロセス 4) 高等部 3 年の「生活単元学習」授業づくりのプロセス (1) 授業実践 1	共著 (分担)	平成 21 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 53 集/144-147 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－自立と社会参加をめざす教育内容と学習計画(2)－」の主題のもと、よりよいコミュニケーションについての授業づくりプロセスと実践について報告した。
6) 研究授業実践録 IV. 高等部研究 2. 授業づくりの実際 1) 高等部 1 年の授業実践	共著 (分担)	平成 22 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 54 集/133-135 頁)	「自立と社会参加をめざす特別支援教育時代のカリキュラム (3 年次)－学習内容表の編成と指導計画－」の主題のもと、学習内容表を用いた模擬実習についての授業実践を報告した。
7) 音楽・造形・体育における各部間の学習内容表上のつながり(グループ研究) II. 音楽	共著 (分担)	平成 23 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 55 集/23-25 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－『学習内容表』と『個別教育計画』を活用した授業づくり－」の主題のもと、幼稚部から高等部までの音楽の系統性、発展性や、学習内容の重点等を協議した結果をまとめた。(別府さおり・山口京子)
8) 研究授業実践録 IV. 高等部研究 1. 問題と目的	共著 (分担)	平成 23 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 55 集/82-83 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－『学習内容表』と『個別教育計画』を活用した授業づくり－」の主題のもと、これまでの高等部の研究成果と今年度の研究課題について概括した。
9) 研究授業実践録 IV. 高等部研究 3. 成果と課題	共著 (分担)	平成 23 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 55 集/96-97 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは－『学習内容表』と『個別教育計画』を活用した授業づくり－」の主題のもと、共に学ぶ良さを活かした生活単元学習の授業づくりの成果と課題を整理した。

10) 生活・音楽・造形・体育の概説 (グループ研究) III. 音楽の概説	共著 (分担)	平成 24 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 56 集/29-34 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは一系統性・発展性のある指導を実現する指導計画と授業づくり」の主題のもと、音楽のねらいの系統性、発展性や指導内容等をまとめ概括した。(別府さおり・大蔵みどり・根岸由香・厚谷秀宏・貝阿彌里美・伊藤かおり)
11) 研究授業実践録 IV. 高等部研究 1. 問題と目的	共著 (分担)	平成 24 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 56 集/86-87 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは一系統性・発展性のある指導を実現する指導計画と授業づくり」の主題のもと、これまでの研究成果と今年度の研究課題、「生活」のねらいについて概括した。
12) 研究授業実践録 IV. 高等部研究 3. 成果と課題	共著 (分担)	平成 24 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 56 集/96-97 頁)	「特別支援教育時代のカリキュラムとは一系統性・発展性のある指導を実現する指導計画と授業づくり」の主題のもと、生活単元学習の授業づくりと高等部の特色、評価方法の整理と単元評価、授業評価の追究についてまとめた。
13) 第 2 章 指導形態の概説 IV. 音楽	共著 (分担)	平成 25 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 57 集/46-51 頁)	「教育課程(指導計画集)平成 24 年度版」の主題のもと、音楽のねらいの系統性、発展性や指導内容等をまとめ概括した。(別府さおり・大蔵みどり・根岸由香・厚谷秀宏・中武里美・伊藤かおり)
14) 特別支援教育研究センター	単著	平成 26 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 58 集/55-56 頁)	教材・指導法のデータベース構築や JICA アフリカ地域研修への協力などの、特別支援教育研究センターの取組と課題について報告した。
15) 「学校研究」は教師の授業実践(実践知)にいかにかに寄与するのか?—「学校研究」と授業実践、教育システム、教師の同僚性との関連を考える	共著	平成 29 年 2 月	筑波大学附属大塚特別支援学校研究紀要 (第 61 集/131-134 頁)	学校研究に組織全体で取組み、日々の授業実践につなげていくための運用の工夫と課題について、授業研究会における教師の学び合い、「個別の教育的ニーズ支援システム」の開発と運用、学校研究と日々の学校運営における伝承と認め合いの実践例が紹介された。実践現場に立つ教師の主体性の中から学校研究が生まれることの重要性、協同作業の意義、今の時代に合った「使命感」の捉え直しの重要性が挙げられた。(田上幸太・吉井勘人・仲野真史・中込昭彦・原満登里・別府さおり)
4 研修報告書 各附属学校の国際教育活動	共著	平成 26 年 3 月	附属学校国際教育推進	「附属学校の『国際教育拠点』活動の新

JICA アフリカ研修を中心に (特別支援教育研究センター)	(分担)	月	委員会報告書 (第5集/70-73 頁)	たな展開ーグローバル人材の育成を目指してー」の主題のもと、特別支援教育研究センターが中心となり附属特別支援学校等において実施した JICA アフリカ研修について報告した。各校での研修内容や研修生のアンケート結果についてまとめた。
5 東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究プロジェクト報告 1) ボランティアセンター的機能の構築と展開に関するプロジェクト (1)	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 (第 22 号/203-206 頁)	当該年度のボランティア活動の成果と課題、学生がボランティアに関心をもち、情報収集できる学内環境の整備についてまとめた。執筆部分は「5. 今年度の活動 (1) 『おにいさん・おねえさん』子ども電話相談」の相談員人数や継続研修の概要である。(石田祥代・別府さおり・西村昭徳・菊地春樹・渡部雪子・石井辰典)
2) ボランティアセンター的機能の構築と展開に関するプロジェクト (2)	共著	平成 28 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 (第 23 号/240-245 頁)	当該年度のボランティア活動の成果と課題、成果の発表についてまとめた。執筆部分は「5. 今年度の活動 (1) 『おにいさん・おねえさん』子ども電話相談、(5) 地域ボランティア④第 6 回千葉県電動車椅子サッカー大会、および 6. 平成 27 年度大学生等のボランティア・社会貢献活動推進セミナーに係る実行委員会への参画」である。(石田祥代・別府さおり・朝比奈朋子・石崎一記・菊地春樹・夏原隆之・西村昭徳・渡部雪子)
3) ボランティアセンター的機能の構築と展開に関するプロジェクト (3)	共著	平成 29 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 (第 24 号/212-215 頁)	当該年度のボランティア活動の成果と課題についてまとめ、今後のボランティア活動の展開のあり方を考察した。執筆部分は「5. 今年度の活動 (1) 『おにいさん・おねえさん』子ども電話相談、および (5) 地域ボランティア 5」平成 28 年度大学生等のボランティア・社会貢献活動推進セミナーに係る実行委員会への参画」である。(石田祥代・別府さおり・朝比奈朋子・宮村りさ子・西村昭徳・菊地春樹・渡部雪子・石崎一記・中瀬雄三)
4) キャンパス内外で活躍できるリーダーの養成に関するプロジェクト	共著	平成 30 年 3 月	東京成徳大学研究紀要 (第 25 号/166-170 頁)	リーダー養成の機会と方法について、具体的な実践を踏まえ考察した。執筆部分は「1. プロジェクトの目的、2. プロジェクトの内容、3. プロジェクトの計画、4. 期待される成果、5. 平成 29

				<p>年度の成果（２）授業外でのボランティア活動やリーダー養成に参加を促し、必要に応じてスーパービジョンを行う 1] ②、2]、3] ①～③、（３）リーダー学生の養成方法を検討し、実践を行う、6. 本事業の評価と今後の課題」である。（別府さおり・宮村りさ子・中瀬雄三・菊池春樹・朝比奈朋子）</p>
<p>6 東京成徳の心理学 1) 障害のある子どもの「プランニング」と意欲・意志</p>	<p>単著</p>	<p>平成 27 年 4 月</p>	<p>東京成徳の心理学（43 頁）</p>	<p>プランニングとは何か、障害のある子どものプランニングに関する研究成果を支援に結びつける視点について概説した。</p>
<p>2) 「心理検査で何がわかるの？」という疑問から心理学を考えてみる</p>	<p>単著</p>	<p>平成 27 年 4 月</p>	<p>東京成徳の心理学（44 頁）</p>	<p>心理検査の目的と取り扱い、自己理解や他者理解について概説した。</p>
<p>7 研究雑誌 巻頭言 教職課程年報創刊にあたって一教員養成課程を担当しての雑感一</p>	<p>単著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学教職課程年報（第 1 号／3 頁）</p>	<p>今般の教育の動向としてインクルーシブ教育システム構築に向けた特別支援教育の推進を取り上げ、通常教育と特別支援教育の二分法に基づいた教育システムの中で教員養成が行われていることの自覚が必要であること、教師の力量形成として主観と客観が相互に影響し合い螺旋状に伸びていくことが重要であることを述べた。</p>
<p>8 学会発表 1) CAS による注意欠陥多動性障害児の注意の評価</p>	<p>共同</p>	<p>平成 13 年 6 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 39 回大会発表論文集（CD-ROM）ポスター発表 2151</p>	<p>CAS を用いて注意の測定を行った結果、ADHD 児は健常児群より反応時間が長く、正答数が少ないことが示され、特定の刺激に注意を向けたり、妨害刺激に対する反応を抑制したりする活動に困難があることが示唆された。（別府さおり・前川久男・岡崎慎治）</p>
<p>2) Crack-the-Code を用いた注意欠陥多動性障害児のプランニングの評価</p>	<p>共同</p>	<p>平成 14 年 7 月</p>	<p>日本発達障害学会第 37 回大会発表論文集（52 頁）</p>	<p>Crack-the-Code を用いてプランニングの評価を行い、ADHD 児と健常児群との比較検討を行った。健常児の誤答群および ADHD 児の誤答の場合、誤移動数が多く、またそれを修正できないことが特徴であり、自分が実行したプランを評価し、調整していくことに困難があることが考えられた。（別府さおり・岡崎慎治・前川久男）</p>
<p>3) 注意欠陥／多動性障害</p>	<p>共同</p>	<p>平成 15 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 41</p>	<p>3名の ADHD 児について、それぞれ対応す</p>

<p>児のプランニングに関する研究－Crack-the-Code を用いた検討－</p>		月	<p>回大会発表論文集（307頁）</p>	<p>る年齢の健常児群と比較検討することでプランニングの特徴を明らかにすることを目的とし、Crack-the-Code を用いて検討した。その結果、正答数は健常児とほぼ同じだが衝動的な反応をしたと考えられる児、解決できる問題が少なく、表象、予測、調整の困難が推察された児、健常児と同程度の児がおり、ADHD 児の中に異なるプランニングの特徴を持つタイプの存在が示唆された。(別府さおり・岡崎慎治・前川久男)</p>
<p>4) Crack-the-Code を用いた注意欠陥／多動性障害児のプランニングプロセスに関する予備的検討－言語的指標を用いた分析－</p>	共同	平成 16 年 9 月	<p>日本特殊教育学会第 42 回大会発表論文集（472頁）</p>	<p>コンピュータ上の記録と言語的指標を用いた時系列の分析から、プランニングのプロセスやその中に含まれるパターンを特定するための予備的検討を行なった。Crack-the-Code を用いて発話とチップの移動を時系列で記述した結果、移動の決定に関する発話と実行の繰り返し、あるいはそれに課題の明確化に関する発話が先行するという問題解決過程が示された。(別府さおり・岡崎慎治・前川久男)</p>
<p>5) 注意欠陥／多動性障害児の時間評価への援助に関する予備的検討－スケジュール表を用いた指導を通して－</p>	共同	平成 16 年 9 月	<p>日本特殊教育学会第 42 回大会発表論文集（486頁）</p>	<p>ADHD 児の個別学習指導において、スケジュール表を用いて見通しをもたせるとともに、プリント学習にかかる時間を予想させ、実際にかかった時間を伝えることで、時間評価の難しさを援助した。その結果、一定時間、あるいは一定量の課題に取り組む構えを形成できる可能性が得られたと考えられた。(岡崎慎治・坂尻千恵・別府さおり・前川久男)</p>
<p>6) 注意欠陥/多動性障害児のプランニングの特徴－Crack-the-Code を用いた検討－</p>	共同	平成 17 年 6 月	<p>第 93 回日本小児精神神経学会発表論文集（23頁）</p>	<p>ADHD 児群、健常児群を対象とし Crack-the-Code を用いて配列の正誤、最初の潜時と全移動数の比率等を記録、算出し 2 群間の比較を行った。ADHD 児群は最初の潜時が短く、表象に時間をかけず初期状態の理解やゴールの設定の前に移動を開始すると考えられた。(別府さおり・前川久男・岡崎慎治・二上哲志・立川和子・松田素子・市川正嗣)</p>
<p>7) 自閉症生徒に対するひらがなの弁別指導－視覚的注意の誘導から制御へ－</p>	共同	平成 17 年 9 月	<p>日本特殊教育学会第 43 回大会発表論文集（404頁）</p>	<p>知的障害を併せ有する自閉症生徒に、マトリクスを用いて注意の制御をかけた見本あわせ手続きにより形の類似したひらがなの弁別指導を実施した結果、単文字および音声とのマッチングが正しくできるようになった。(別府さおり・前川久男)</p>

8) 知的障害養護学校高等部における教育実践情報の蓄積・整理と個別の教育支援計画(2)－教育現場からの情報発信と支援の形成	共同	平成 18 年 9 月	日本特殊教育学会第 44 回大会発表論文集 (64 頁)	特別支援学校における個別教育計画の作成と指導実践および活用について、学校・進路先の担当者の双方がそれぞれの立場から支援情報の整理と活用について報告し、討論した。また、本校高等部の社会生活支援項目表を福祉的支援の現場におけるアセスメントツールとして、活用する試みについても提案した。(伊藤かおり・小林美千代・阿部崇・田上幸太・宇佐美太郎・別府さおり・北村洋次郎・堀田英子・篠原吉徳)
9) 知的障害特別支援学校高等部における教育実践情報の蓄積・整理と個別の教育支援計画(3)－支援者をサポートするための情報提供と連携－	共同	平成 19 年 9 月	日本特殊教育学会第 45 回大会発表論文集 (163 頁)	個別の教育支援計画と支援者をサポートするための移行支援情報の精選・発信について報告した。連携先の企業、福祉施設等のスタッフからは、教育現場から発信された情報について評価、考察し、より幅広く教育現場に望むことを提言した。また、障害者自立支援法の成立を受けた障害者の自立と社会参加の姿の変化、それに伴う学校の役割について討議した。(伊藤かおり・小林美千代・阿部崇・田上幸太・宇佐美太郎・別府さおり・居林弘和・堀田英子・篠原吉徳)
10) 個別の教育支援計画を実践に活かす協働の試み(第三報)－アイディアプロセッサを用いた指導により生徒本人の課題に対する理解を促す試み－	共同	平成 19 年 9 月	日本特殊教育学会第 45 回大会発表論文集 (607 頁)	高等部 1 年の自閉症生徒の三者面談にて、スクリーンに投影したパソコンの画面にアイディアプロセッサの一つである「inspiration」を映し、個別教育計画の内容、生徒の夢、家族の思い描く将来像とそれらの因果関係を図示し、「指導の見通し図」を作成しながら話し合いを行った。本生徒は、作業学習でおしゃべりしてしまった事実と、頑張ってシールをためたら CD が買えることとの関係を理解し、おしゃべりをなくすことができた。(宇佐美太郎・別府さおり)
11) 知的障害者の生活の実態から考える学校教育の課題と教育内容－高等部卒業生への調査および支援者からの提言を踏まえて－	共同	平成 20 年 9 月	日本特殊教育学会第 46 回大会発表論文集 (94 頁)	卒業生調査から生活と余暇に関する分析を行い、作業学習や日常生活指導等学校時代の学習が卒業後に役立っていること、家庭外での生活が成長を促すことが示唆された。生活を支援する立場からは、卒業後すぐに家庭から離れるケースが増えていること、個別の支援計画や生活実習に基づいた卒業後の生活への移行の流れを構築することが必要との提言があった。(別府さおり・伊藤かおり・阿部崇・

<p>12) 知的障害生徒の因果関係の理解による行動調整に関する事例的検討—行動と結果を図示する事で理解を促し問題となる行動を軽減する試み—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 20 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 46 回大会発表論文集 (297 頁)</p>	<p>宇佐美太郎・田上幸太・松岡ふみ・居林弘和・本間貴子・篠原吉徳)</p> <p>対象の自閉症生徒は、多動傾向と環境の変化への過敏さがあり、服を破く、公道を走る等の行動が問題とされていた。適切な行動と不適切な行動それぞれの結果を図示して伝え、考える機会を繰り返し設定したところ、図から適切な行動を選んで実行するようになり、落ち着いて学校生活を送れるようになった。行動と結果の因果関係を理解し、自分の意思で行動をコントロールできるようになったと考えられた。(宇佐美太郎・別府さおり)</p>
<p>13) 学校教育の成果と課題から考える知的障害特別支援学校高等部の教育課程づくり—卒業生への調査結果に基づく検討—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 21 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集 (716 頁)</p>	<p>卒業生調査の結果、卒業生本人の話題提供から、働く学習や対人関係の学習、家庭外での生活、卒後の人生の見通しを持たせることが教育課程における重点課題であることが示された。社会福祉法人と連携して開始した生活体験実習では、保護者も本人も具体的な生活のイメージが持てること、親から離れた生活への不安が自信に変わったこと等が示唆された。 (別府さおり・本間貴子・田上幸太・伊藤かおり・宇佐美太郎・松岡ふみ・西原数馬・篠原吉徳・米田宏樹)</p>
<p>14) 知的障害特別支援学校で育てたい「生活する力」とは—卒業生本人調査とグループホームにおける生活体験実習の取り組みから—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 22 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集 (52 頁)</p>	<p>卒業生調査の結果および生活体験実習の取り組みから、学校教育において、より生活文脈を意識した授業展開ができる可能性が示された。グループホームで生活を支援する立場からは、学校との支援方針の共有や実習の意義の共通理解が重要との意見が出された。指定討論を踏まえ、生活体験実習の取り組みを広げるには制度上の問題があることが確認された。(田上幸太・別府さおり・伊藤かおり・宇佐美太郎・松岡ふみ・本間貴子・西原数馬・篠原吉徳)</p>
<p>15) 「指導の見通し図」を用いた知的障害特別支援学校における進路指導—夢を叶えるためのロードマップの理解と自発性の高まり—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 22 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集 (445 頁)</p>	<p>声優になりたいという高機能自閉症生徒と保護者、担任 2 名の三者面談にて「指導の見通し図」を用いて進路先について話し合った。声優で食べていくのは現実的には難しいことを伝えつつ、声優という夢に向けて日中は働くことを提案したところ、本生徒は「一円でも多く金を貯める」と言いだし、希望の就職先で必要</p>

<p>16) 知的障害者が主体者として生活する力を育てる特別支援学校における実践のあり方—生活文脈を生かした指導計画と生徒自身の課題理解および家庭との連携</p>	<p>共同</p>	<p>平成 23 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 49 回大会発表論文集 (111 頁)</p>	<p>なパソコンの学習に自ら取り組み始めた。(宇佐美太郎・別府さおり)</p> <p>「生活する力」を育むための生活文脈を意識した洗濯の授業実践、「指導の見通し図」を用いた本人・保護者・教員の課題理解と効果的な連携について報告を行った。保護者、グループホームの支援者の意見から、連携の成功により保護者が子を生活体験実習に送り出すことができたこと、本人の生活スキルや自発性の向上が認められたことが確認された。(別府さおり・宇佐美太郎・田上幸太・本間貴子・伊藤かおり・上田みどり・西原数馬・篠原吉徳)</p>
<p>17) 自閉症傾向児の作業学習におけるセルフマネジメントスキル獲得経過の検討</p>	<p>共同</p>	<p>平成 23 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 49 回大会発表論文集 (288 頁)</p>	<p>自閉傾向のある生徒を対象とし、作業学習においてチェック表を用いた自己観察記録および自己評価を行ったところ、課題達成率の向上と自発的で適切な質問の表出回数の増加が認められた。(柴田航平・西原数馬・田上幸太・別府さおり・伊藤かおり・小野里美帆)</p>
<p>18) 知的障害者・発達障害者の「したい」「なりたい」を引き出す支援や対話—支援計画・指導計画を通して自己理解や主体性を引き出す工夫とは—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 24 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集 (USB メモリ), 自主シンポジウム 86</p>	<p>知的障害児者、発達障害児者の自己理解や主体性を引き出すための支援について、「指導の見通し図」を用いた個別の教育支援計画策定のプロセスと本人参加の意義、障害の軽い生徒との対話と個別の教育支援計画を用いた引き継ぎの重要性が報告された。就労定着支援の立場からは、職場での問題は成長のチャンスであり、本人の自己理解と周囲の適切なフィードバックや傾聴のスキルが必要であるとの報告があった。(宇佐美太郎・別府さおり・田上幸太・伊藤かおり・上田みどり・本間貴子・篠原吉徳)</p>
<p>19) 生活する力を育てる生活文脈を活かした授業づくり (1) —日常場面における生活文脈を取り入れた生活単元学習の授業づくりと手だての工夫—</p>	<p>単独</p>	<p>平成 24 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集 (USB メモリ), P4-E-4</p>	<p>生活する力を身につけるための授業づくりにおける学習展開や手だての工夫を検討した。生活体験実習の研究成果から、日常的に部屋を整理整頓する力が求められるという示唆に基づき、整理整頓を題材として取り上げた。学校の生活文脈の中に獲得させたい課題を位置づけるため、授業の作業的活動の中に整理整頓を取り入れた。改善の様子の映像、課題達成回数のグラフを見せ意識を高め定着化を図ることで、全生徒に改善がみられた。</p>

<p>20) 生活する力を育てる生活文脈を活かした授業づくり(2)－家庭生活や卒業後の生活に活用できる力をつけることを目指して－</p>	<p>共同</p>	<p>平成 24 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集(USBメモリ), P4-E-5</p>	<p>(田上幸太・別府さおり・本間貴子・會澤由美子)</p> <p>家庭や入所施設等でも活用できる掃除や整理整頓技能の獲得と、身近な環境をより快適にすることの理解を目的とした授業実践に取り組んだ。ロッカーや棚を撮影した画像を見て客観的に現状を理解した上で、具体的な整理整頓の方法を学んだ。生活文脈に沿うよう日常生活場面等でも随時実践を重ねた結果、自ら教室や自宅をきれいにする生徒も出てきた。家庭等での活用状況の評価が課題であることが示唆された。(別府さおり・田上幸太・西原数馬)</p>
<p>21) DN-CAS と WISC-IV によるアセスメントを活用した事例－同時処理とプランニングに困難を示した知的障害のある児童への指導－</p>	<p>単独</p>	<p>平成 25 年 8 月</p>	<p>日本発達障害学会第 48 回研究大会発表論文集(117 頁)</p>	<p>小学部に在籍する知的障害のある自閉症スペクトラム児 1 名に対し、DN-CAS、WISC-IV、PASS 評定尺度を用いたアセスメントを実施したところ、同時処理の弱さ、継次処理の強さ、聴覚的短期記憶の良さ等が明らかになった。これらの認知特性に基づき、荷物をしまう際に空間の活用の仕方を手順として決め、本人が言語化しながら行うようにしたり、写生の際に対象物とその位置を順番に伝えたりしたところ、成果が認められた。</p>
<p>22) WISC-IV、K-ABC、DN-CAS による知的障害生徒のアセスメント－作業学習等の指導に活かすための心理検査解釈の視点を探る－</p>	<p>共同</p>	<p>平成 25 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 51 回大会発表論文集(CD-ROM), P5-F-10.</p>	<p>高等部に在籍する知的障害のある生徒 1 名に対し、WISC-IV、DN-CAS、K-ABC を実施し、補正年齢算出の手続きを用いて評価点を算出した。対象生徒は、視覚情報処理、聴覚記憶、言語の活用といった、複数の検査で類似したものが見られる視点から、手順表の選択と活用、タオルたたみの正確さの向上等において、3 検査の結果を作業学習に活用することができた。(別府さおり・伊藤かおり・本間貴子・田上幸太・宇佐美太郎・岡崎慎治・前川久男・東原文子)</p>
<p>23) 「わたし」と「あなた」の関係から「仲間」関係へそして、社会参加へ－「人間関係」を育む「授業づくり」を系統的・発展的に考える－</p>	<p>共同</p>	<p>平成 26 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 52 回大会発表論文集(USBメモリ), 自主シンポジウム 70.</p>	<p>「学習内容表」を用いた、知的障害特別支援学校幼稚部、中学部、高等部の各段階における「人間関係」を育む授業づくりのプロセスを紹介した。また、「人間関係」の能力を捉える観点、「人間関係」を育む授業の系統性・発展性の側面について協議を行った。(田上幸太・吉井勘人・仲野みこ・高津梓・別府さおり・藤原義)</p>

<p>24) 多様なニーズのある児童が共に学び合う授業に関する一考察—生活単元学習「入門！そら組道場」の授業づくりに焦点を当てて—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 26 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 52 回大会発表論文集 (USB メモリ), P5-C-1.</p>	<p>博) 知的障害特別支援学校小学部の生活単元学習の授業を、単元設定、目標設定、手だて、児童同士の相互作用の等の観点から分析した。児童同士が認め合い高め合うことができる学級集団へと成長し、また個々の目標も概ね達成できたのは、手だての工夫に加え、仲間を承認し合う関係の形成、差異から学びを深めることができたためと考察された。(別府さおり・佐藤知洋・小笠原志乃)</p>
<p>25) 「生活する力」を育てる教育実践の検証—グループホーム入居者へのインタビュー調査をもとに—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 27 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 53 回大会発表論文集 (USB メモリ), P9-3.</p>	<p>「生活する力」を育てる教育実践の成果を検証するため、知的障害特別支援学校を卒業したグループホーム入居者を対象とした調査を行った。その結果、生活体験実習や短期入所等での自宅外での生活経験が心構えや見通しにつながり、生活の場の選択・決定のための比較検討も可能になることが示唆された。(別府さおり・田上幸太・宇佐美太郎)</p>
<p>26) A Case Study about a ASD and Intellectual Disabilities Student: Understanding His IEP and Effort to Become Employed by Using 'The Delineation Diagram for Teaching and Learning'</p>	<p>共同</p>	<p>平成 28 年 7 月</p>	<p>The 31th International Congress of Psychology, PS26P-08-385. International Journal of Psychology, Volume 51, p. 490.</p>	<p>By using 'the Delineation Diagram for Teaching and Learning', the student was able to regulate himself with confidence. Furthermore, the cooperation between his teachers and parents helped him to more deeply understand about the nature of work. Learning according to the DDTL finally enabled him to get a job at the restaurant. (Saori Beppu, Yoshinori Shinohara, Taro Usami)</p>
<p>27) 「学校研究」は教師の授業実践(実践知)にいかに関与するのか? 「学校研究」と授業実践、教育システム、教師の同僚性との関連を考える</p>	<p>共同</p>	<p>平成 28 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 54 回大会発表論文集 (CD-ROM), 自主シンポジウム 67.</p>	<p>前掲 3 15) (田上幸太・吉井勘人・仲野真史・中込昭彦・原満登里・別府さおり)</p>
<p>28) 私立大学における特別支援教育教員養成の現状と課題</p>	<p>共同</p>	<p>平成 29 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 55 回大会発表論文集 (CD-ROM), 自主シンポジウム 4-5.</p>	<p>教職課程の在り方や学修内容、教育実習の実施方法など、私立大学ゆえに抱える諸問題と今後のより良い人材育成について検討した。各大学の特長として実践的スキルの修得、福祉を学んだ人材の教育現場への配置、広く障害児者に関わる人材養成が挙げられた。課題として、カリ</p>

<p>29) 特別支援教育における同僚性を介した教師の学びと教師文化の継承と創造—よりよい教育をするために、何を、どのように学ぶことができるのか?—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 29 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 55 回大会発表論文集 (CD-ROM), 自主シンポジウム 5-15.</p>	<p>キュラム、学生確保、学生の負担が挙げられた。今後、教員の資質・能力の整理とカリキュラムの工夫を行う必要性が指摘された。(高橋幸子・神田基史・森下由規子・別府さおり・宮崎眞・明官茂)</p> <p>自主研修会は若手の力量形成や他者からの学びに効果があること、学校研究が教師の学びの場になるためには、資源の発見と活用及びコミュニケーションの視点が重要であること、教育センターの研修では個別の指導計画を活用した授業実践が課題として見えてきたことなどが挙げられた。特別支援教育に携わる教師の職能成長モデルの開発や、子ども観・障害観などを同僚性の中で深めるためのアプローチの必要性が示唆された。(吉井勘人・田上幸太・別府さおり・中込昭彦・原満登里・水野高明)</p>
<p>30) 福祉系大学での学びは特別支援教育にどう生かされているのか—特別支援学校教諭へのインタビューに基づいた検討の試み—</p>	<p>単独</p>	<p>平成 29 年 12 月</p>	<p>日本福祉教育・ボランティア学習学会全国大会第 23 回長野大会報告要旨集 (198-199 頁)</p>	<p>福祉・心理系大学を卒業した特別支援学校教諭 1 名にインタビューを行った。教育実践、教育観いずれに関しても、利用者の感情表現を大切に、自己決定を促し尊重するといった相談援助の原則、理念及び方法、精神保健福祉の専門性に関連すると判断される発話が認められた。また、教職と福祉の融合があることも語られ、福祉の学びが特別支援教育に生かされていると考えられた。</p>
<p>31) Early growth in word and nonword reading fluency in a transparent syllabary</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 7 月</p>	<p>Twenty-Fifth Annual SSSR (Society for the Scientific Study of Reading) Meeting. Poster Session III-46.</p>	<p>Grade 1 and 2 Japanese children were assessed on word and nonword reading fluency in Hiragana. Despite the remarkable differences in the growth patterns between word and nonword reading fluency in Hiragana, they are likely to rely on similar underlying processes and develop closely in tandem during this period. (Tomohiro Inoue, George K. Georgiou, Naoko Muroya, Katsutoshi Sato, Saori Beppu, Hisao Maekawa, Rauno Parrila)</p>
<p>32) 生徒の「願い」を育てる授業とは?</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 56 回大会発表論文集 (CD-ROM), 自主シンポジウム 2-15.</p>	<p>特別支援学校 (知的障害) 中学部で、生徒の「願い」からグループを編成し、グループの自己選択、調べ学習、体験学習、共有の場としての発表を重視した合同生活の学習を考案し実践した報告であり、</p>

<p>33) 特別なニーズのある児童生徒が在籍する学級の学級経営を通じた教師の職能成長—養成段階、特別支援学校(知的障害)教師、小学校教師それぞれが悩み、学び、獲得したこと—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 56 回大会発表論文集 (CD-ROM), 自主シンポジウム 5-07.</p>	<p>「願い」を育てる授業の在り方について検討した。(阿部崇・工藤傑史・安達敬子・厚谷秀宏・工藤真生・仲野みこ・深津達也・小島道生・別府さおり)</p> <p>特別なニーズのある児童生徒が在籍する学級の学級経営を焦点とし、特別支援学校(知的障害)と小学校通常学級の初任期からベテラン期にあたる教師個々の経験として、困難と他者からの学び、学級経営観の転換、生徒と教師双方の成長、後進の育成等が語られた。特別支援学校(知的障害)と小学校の教師の、集団と個の捉え方に関し議論がなされた。(別府さおり・吉井勘人・田上幸太・井口素笑・小島貴之・中込昭彦)</p>
<p>34) 特別支援教育を観点とした教員育成指標の検討 (1) —教員育成指標において特別支援教育はどのような位置づけにあるのか—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>日本特殊教育学会第 56 回大会発表論文集 (CD-ROM), ポスター発表 3-14.</p>	<p>分析対象とした 55 自治体のうち特別支援学校(学級)教諭を対象とした教員育成指標を策定していたのは 1 割弱であり、特別支援教育の専門性を反映した学びや職能成長の道標となるものは現時点では少ないと考えられた。「教諭」及び「小学校教諭」を対象とした 49 の教員育成指標のほとんどに特別支援教育の内容が記載されており、特別な配慮を必要とする児童生徒への指導の充実を目指す方向性の表れと推察された。(別府さおり・吉井勘人・田上幸太)</p>
<p>35) 医療的ケアが必要な未就学児の保育園の利用に関する研究 (1) —保育園を含む社会資源の利用実態と保護者のニーズを中心に—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 12 月</p>	<p>日本福祉心理学会第 16 回大会発表論文集 (45 頁)</p>	<p>医療的ケア児の保護者を対象に質問紙調査を実施した。就学前に保育園を利用しなかった理由として、受入体制の不備、子どもの状態や体調に合った選択、長期入院後に親子の時間を過ごすための選択等が挙げられた。保護者によって保育園を始めとする社会資源の利用ニーズは異なっており、未就学の医療的ケア児とその保護者が自身に合った選択をし、選択した場で受け入れられ過ごせることが重要であると考えられた。(伊藤瑚乃美・別府さおり)</p>
<p>36) 医療的ケアが必要な未就学児の保育園の利用に関する研究 (2) —保育士の医療的ケアに関する理解と保育園での受け入れについての考え—</p>	<p>共同</p>	<p>平成 30 年 12 月</p>	<p>日本福祉心理学会第 16 回大会発表論文集 (46 頁)</p>	<p>保育園に勤める保育士を対象に質問紙調査を実施した。医療的ケアの名称を知っていると回答した者のうち、医療的ケア児を保育園で「可能な限り受け入れたい」又は「当該児の様子と園の状況を考慮して場合によっては受け入れたい」と回答</p>

<p>37) 特別支援教育を観点とした教員育成指標の検討 (2) -キャリアステージごとの特別支援教育に関する内容の特徴-</p>	<p>共同</p>	<p>令和元年9月</p>	<p>日本特殊教育学会第57回大会発表論文集(CD-ROM), ポスター発表3-11.</p>	<p>した者は8割近くであった。しかし、人的、物的環境が未整備な状況での受け入れが本人にとって良いのか、疑問を感じる保育士もいることが示された。(別府さおり・伊藤瑚乃美)</p> <p>特別支援教育に関する内容がキャリアステージごとに記載された44の教員育成指標を分析対象とし、頻出語の抽出、対応分析、「理解」を抽出語としたKWIC コンコーダンスによる分析を行い、各段階に特徴的な語とその用いられ方を検討した。その結果、採用時は基礎的理解、初任期は子ども理解と実践、中堅期及びベテラン期は校内外の役割に重点が置かれていることが明らかになった。(別府さおり・吉井勘人・田上幸太)</p>
<p>38) 知的障害教育に携わる教師の成長、発達に関する研究-同僚性と男女差に焦点を当てた分析-</p>	<p>共同</p>	<p>令和2年9月</p>	<p>日本特殊教育学会第58回大会発表論文集(CD-ROM), ポスター発表P3-084.</p>	<p>特別支援学校(知的障害)教諭を対象に質問紙調査を実施した。その結果、知的障害教育において重視することや力量向上の要因として、女性は男性に比べ人間関係に関する項目を選択する割合が高く、男性は女性に比べ、長期研修や職務上の役割に関する項目を選択する割合が高かった。性別により成長、発達の鍵となる要因に違いがあることが示唆された。(別府さおり・吉井勘人・田上幸太)</p>
<p>39) Why Teachers Struggle to Feel Rewarded and Self-confident: A Study of Associated Factors</p>	<p>単独</p>	<p>令和3年7月</p>	<p>The 32th International Congress of Psychology, Poster session 37.</p>	<p>A total of 1,830 special school teachers filled out the questionnaire. It was found that among these, 113 had never felt rewarded or confident during the course of their work: less teaching experience in special school, less time to learn, a negative attitude toward collaborative research, and more likely to think that books, meetings, lectures, and dealing with students and their parents were not helpful to them.</p>
<p>40) Preliminary study of assessment of the creativity on children with developmental</p>	<p>共同</p>	<p>令和3年7月</p>	<p>The 32th International Congress of Psychology, Poster session 77.</p>	<p>Assessment and intervention for the creativity as strength characteristics of children with developmental disorders was</p>

disorders				preliminarily examined in terms of interactive assessment mediated by the computer-based problem-solving task. At the first interaction, rate of correct answer which decreased as the difficulty level increased and evaluation time increased, and the performance change effected by the feedback was not observed. Through several interactions, children's performance on the task was improved and their creative thinking was clarified. The results suggest the significance of interactive assessment with a coach using mediation by the computer-based tasks. (Shinji OKAZAKI, Saori BEPPU, Shiho OKUHATA, Tomohiro INOUE, Toshio OHYANAGI)
41) 発達障害児者の認知的クリエイティビティの評価と支援	共同	令和3年9月	日本特殊教育学会第59回大会発表論文集(CD-ROM), 自主シンポジウム60.	発達障害における認知特性の強みとしての認知的クリエイティビティについて概念整理を行うとともに、生体反応計測を通じた客観的評価と行動及び言語的指標による評価の提案が行われた。評価に基づく支援として、指導者と発達障害のある子どもとの相互作用を通じた認知的クリエイティビティ促進の支援方法が検討された。(岡崎慎治・大柳俊夫・奥畑志帆・別府さおり・井上知洋)
42) 発達障害児の認知的クリエイティビティ評価の事例的検討-言語的指標による分析の試み-	共同	令和4年9月	日本特殊教育学会第60回大会発表論文集(CD-ROM), P12-23.	発達障害児1名を対象として認知的クリエイティビティ促進課題を実施し、言語的指標を用いた分析を行った。その結果、発達障害の特性が反省的な言語化に反映され、問題解決に寄与した可能性が示唆された。(別府さおり・石原章子・奥畑志帆・井上知洋・大柳俊夫・岡崎慎治)
43) 発達障害児者の認知的クリエイティビティの促進:問題解決課題を用いた評価と支援の検討	共同	令和4年10月	日本LD学会第31回大会WEB論文集, 自主シンポジウムJ05	問題解決課題を用い、定型発達成人のNIRS計測を行い前頭前部の関与を明らかにした研究、定型発達成人の言語的指標の分析を行い意図的な方略と正答数の関連を明らかにした研究、発達障害児に対するフィードバックの効果とインタラクティブな関わりの影響を明らかにした研究、そして課題の開発

<p>44) Brief report of interactive assessment to the cognitive creativity of children with developmental disorders using digitized problem-solving task</p>	<p>共同</p>	<p>令和 4 年 12 月</p>	<p>IACEP International Virtual Conference 2022, Paper Session 2: Emotion and Cognition</p>	<p>経緯に関する話題提供が行われた。認知機能評価と支援の観点から検討を行った。(岡崎慎治・本間美桃子・<u>別府さおり</u>・石原章子・大柳俊夫・井上知洋・奥畑志帆)</p> <p>5 children with neurodevelopmental disorders participated in the experiment which use these tasks; MWQ, UUT, CTC. Results suggest that problem-solving task for interactive assessment used in this study may contribute to the promotion of planning and cognitive creativity in children with neurodevelopmental disorders. (Shinji Okazaki, Akiko Ishihara, <u>Saori Beppu</u>, Shiho Okuhata, Tomohiro Inoue, Toshio Ohyanagi)</p>
<p>45) 神経発達症における認知的強みの評価に関する予備的検討 -ADHD 傾向と創造性における拡散的思考・マインドワンダリングとの関連の検討-</p>	<p>共同</p>	<p>令和 5 年 3 月</p>	<p>障害科学学会 2022 年度大会 (Web 開催) , 発表番号⑨</p>	<p>定型発達成人 33 名を対象とし、MWQ、UUT、ASRS を実施した結果、MWQ と ASRS、および UUT の流暢性と柔軟性に強い相関が、MWQ と UUT の独自性、および ASRS と UUT の独自性との間に中程度の相関が認められた。UUT の独自性高群では、MWQ および ASRS の得点が低群より高く、流暢性の標準偏差が大きいことが示された。列挙される数と独自性の高い回答とは関連しないことが示唆された。(石原章子・岡村恵里子・<u>別府さおり</u>・岡崎慎治)</p>